

令和4年度第2回大阪府社会教育委員会議 議事録

日 時 令和4年12月27日(火) 14時～16時

会 場 大阪府咲洲庁舎 44階 大会議室

出席者 岡田議長、小山委員、濱元委員、本田委員、柘井委員、明貝委員、安原委員、山本委員

議 事 (1) 令和4年度子ども読書活動推進事業実施報告等について

(2) 教育コミュニティづくりにおける地域人材の養成について

<意見・質疑要旨>

◆議事(1)令和4年度子ども読書活動推進事業実施報告等について

○委員 読み聞かせは乳幼児などの低年齢の時期に、ぜひやるべき取り組みだと思う。子どもに本を届けるネットワークの整理などで「読書ボランティア」という言葉が出てくるが、これはおそらく教育系のボランティアによる働きかけではないか。どこのボランティア連絡会でも読書ボランティアの団体は非常に多く、未就学の子どもが集まるところなど、いろんなところで活動している。大阪府社会福祉協議会などと連携して、もっと広く取り組むことでより効果的になるのではないかと感じたが、このボランティアはどういった方々が参加されているのか。

○事務局 今回、多言語えほんのひろばで協力していただいたのは、日本語で読み聞かせをするボランティアと、外国語で読み聞かせをするボランティア。当課のホームページにボランティアのリストを掲載するなどして相互に連携した活動をしやすいようにしているが、ボランティア同士の横の連携はこちらも把握しきれておらず、大きな枠組みでの連携がまだできていないのは課題だと捉えている。ボランティアの方が実際にどのような読書活動をされているのかを把握し、更に連携を深めていきたい。

○委員 大阪府社会福祉協議会では所管する41市町村の内、32市町村でボランティア連絡会が設置されている。資料にあるようにボランティアの高齢化とコロナ禍の影響もあり、なかなか思うように活動ができない状況が続いている中で、ボランティア自身のモチベーション低下も課題として挙げられている。そういった中でも絵本の読み聞かせなどを行っているグループもあるが、多言語の対応は市町村によっては難しいところもあると思うので、ぜひ、ボランティアグループと連携し、こういった取組みを促進していただきたいと思った。

○委員 本当にその通りで、すこやかネットが始まる以前、もっと古くからボランティアが読み聞かせをしていた。すこやかネットと大阪府社会福祉協議会のボランティア連絡会の立ち上げが同時期、もしくは少し社会福祉協議会が早かったぐらいだったと思うが、すこやかネットができた際、福祉系のボランティアをうまく取り込めたところは今でもよく連携できているが、あまりうまくいかなかったところは、おそらく今でも教育系ボランティアと福祉系ボランティアがはっきりと分かれていると思う。教育系のボランティアがいくらホームページやチラシで周知しても、おそらく福祉系のボランティアには届かない。福祉系の方は地区福祉委員などのいろんなボランティアをやっている。教育系は読み聞かせ、学校開放、保育などのボランティアをやっている。うまく学校支援地域本部が機能していなか

ったり、すこやかネットができてなかったりするところは、情報共有ができてないので、すこやかネットや学校地域支援本部は重要だと思う。府が取り組む読み聞かせや多言語、多文化共生などは、地域が取り組むのは少し難しいかもしれないが、子どもに絵本の読み聞かせをするような顔の見える関係作りをすることは、地域にポテンシャルがあると思う。そういった点で教育と福祉の連携も必要ではないかと感じた。

○委員 震災時のボランティアでは、初めに福祉系へ案内されたところはずっと福祉系が頑張っておられた。その一方でたくさんある教育系ボランティアとはあまりうまくリンクしていない。これは各地で見られることだと思う。そこをうまくつなげていけたら、部局間の連携として良いと思う。質問だが、この事業の趣旨は在日の外国人にマザータングで絵本を読ませることだったと思うが間違いないか。

○事務局 全ての子どもたちに本を読んでもらうということが趣旨。多文化共生というよりは、言語に関わりなく絵本を楽しんでもらえるよう、例えばフィリピン語を母語としている方であれば、フィリピン語で書かれた絵本を楽しく読んでいただくというのが趣旨。

○委員 するとこの「参加者の声」にある「絵本を介すると外国も身近になると思いました」というのは日本人のご家族の感想だが、準備した外国語を母語とする子どもたちはどれくらい参加していたのか。

○事務局 イオンモール茨木では、来てくれた方々がどの言語を母語としているかわからなかったが、八尾市青少年センターのアンケートにおける「普段は何語で話をしていますか」の質問に対しては31の回答があり、日本語が25、英語、中国語、ベトナム語が6という回答だった。日本語を母語としない回答は19.4%、約2割だった。

○委員 日本の子どもや親が外国の絵本に触れるということも決して悪いことではないが、趣旨としては母語の絵本がなかなか手元に届かない外国の子どもたちに向けた事業だったと思う。イオンモールのような商業施設でやるとたくさん集客ができる一方で、ターゲットを決めて募集するとなれば、参加数は少なくなるかもしれないので、青少年センターなどの方が向いているのではないかと感じた。

○事務局 事業の趣旨からすると、外国語を母語としている子どもたちにもう少し来ていただきたい。もちろん日本語を母語としている方が多く来られることも非常に有用だが、今後は外国語を母語としている方にもっと来ていただけるよう、集客を強化していくことが課題だと考えている。

○委員 多言語読書活動推進事業の「より効果的な周知方法の検討が必要」という内容に関して、市区町村において開催している識字、日本語教室に通っている人たちや、一部の市区町村で開催している子ども向けの日本語教室へ周知すれば、ターゲットに直接届くのではないか。また、学校関連では、市町村の教育委員会がされている日本語指導が必要な生徒を集めた日本語教室もあるので、そこへの周知も検討されてはどうか。同じ事業について質問だが、1万部作られたリーフレッ

トの中にやさしい日本語版を作成されたかどうか。最後に、「多言語絵本の整理・目録等に課題」と書かれており、入手した高価な外国語図書を貸し出しできるように整理・目録化することは大変重要だと思う。これについてはどういう点が課題で、どのように解決しようとしているかを教えていただきたい。

○事務局

やさしい日本語版のリーフレットは作成していないが、やさしい日本語を併記して作成している。整理・目録化については、例えば英語などはわかる方もたくさんいらっしゃるかもしれないが、ネパール語などの場合、熟知している方もあまりいらっしゃらない。インターネット等で検索する際にネパール語で対応するのが難しいといったことも、課題になる。

○委員

ショッピングモールでは1日で195人も来られ、かなり盛況だったと思う。社会教育施設で開かれるよりも、偶然このイベントを見つけて空き時間を利用して参加する方が多いので、日常的に図書館を利用されていない方や、読み聞かせにそれほど熱心でない方を取り込める可能性がある。今後もたくさん取り組んでいただければ良いのではないかと思った。八尾市立青少年センターで開かれたものには1日で50人の来場があり、こちらも決して少なくない。外国人の方がどれだけいたかわからないが、絵本の読み聞かせに親子で参加していただいている外国人の保護者向けに、親子で参加できるイベントや、日本語の学びの場、国際交流の企画などを周知できる機会でもあるので、読み聞かせとともに外国人の方への様々な社会教育活動を伝えていくと良いのではないか。また、例えば先ほど委員が言われたように、多言語絵本のセットを多文化共生という観点で使うことも考えられるのではないか。外国語と日本語を見開きごとに交互に掲載し、外国にルーツをもつ子どもが多い学校などで、日本語と外国語で交互にやれば、自分の母語で発表したり何かを紹介したりする交流につながるのではないか。今後、そういう事例があったら広げてほしい。

○委員

こういった事業で子どもたちの読書環境を整えていただいているのはありがたい。今後もぜひ進めてほしい。今の小学校では、読書活動を進めていくことが大変難しい状況にある。学校ではギガスクール構想によって1人1台パソコンを持つようになり、毎日、登校したらパソコンのスイッチを入れるといった、使う機会を多く持てるよう指導を進めている。学校によっては、毎日、家にパソコンを持って帰って使うよう指導がされており、この影響で確実に読書量が減っている。朝の活動として月曜日は朝礼、火水木金の4日間を活用して朝読書という指導が多くの学校で行われていたが、今は朝の時間にパソコンを使うことがすごく増えている。そして毎日パソコンを持って帰るよう指導している学校では、多くの児童は動画を見ている。今はそういう状況があって、小学校教育の中で読書の時間を確保することがすごく難しい。読書は必ず必要だと思うので、先生方に週2回は朝読書の時間を確保してくださいとお願いしている。教室をのぞいてみると、子どもにパソコンのスイッチを入れさせた後、半数が読書ではなくそのままパソコンをのぞいていることもある。今、小学校では読書活動と、パソコンを使うための時間の確保の両立にすごく苦労している。家庭でもパソコンを使う時間が長くなってきているという新聞報道もあり、当然、その分読書の時間は減っているはず。読書活動の推進に関して小学校でできることに取り組もうと思いつながら、学校現場ではそういった悩みがあることを知っておいていただきたい。

- 委員 ギガスクール構想はコロナ禍で一気に進んだ。オーサービジットが 117 件の応募があったということだが、これは作家が立候補されるのか。
- 事務局 これは登録制としている。こちらから働きかけることもあるし、作家の方から声をかけていただくこともある。
- 委員 作家からすると、やはり印刷された本を読んでほしいという思いもある中で、読書の時間を確保するために、実際に書いた作家さんが来て話してくれるというのは、なかなかユニークで面白いなと感じる。私が解説しますよと言ってくれる方が、これだけたくさんおられることに驚いた。
- 事務局 大変ありがたいと思っている。出版社経由での感想はもちろんだが、ぜひ子どもたちの生の声を聞きたいという作家の方もおられる。子どもの生の声や反応を感じられることは作家さんにとっても貴重な機会となるようで、需要もあると同時に、学校からの応募件数を見ていると子どもや保護者の方の関心も増えている。多くの方に関心を持っていただいております、読書活動の推進に非常に有用なものだと捉えている。
- 委員 乳幼児や幼少期に、読書に興味を持てる様々な活動をしていただいで、すごくありがたい。小学校でも危機的な状況だという意見があったが、中学校、高校でも情報はインターネットやタブレットなどで得るようになっており、字は読んでいるがそれは単なる情報であって、読んでワクワクするような本や、一つの理論体系の本をじっくり読むことがなかなかできていない。そういった意味で、このポップコンクールや、ビブリオバトルのような取り組みをやっていただくことで、本が好きな子はその世界に入り込んで長編をじっくり読めたり、ポップを作ったり、ビブリオバトルに参加したりできるので良い。その一方で、全体にはなかなか広まらないという課題もある。一部の本当に本が好きな子にとってはすごく面白い取り組みだと思うが、全体的に本を読ませるにはどんなことをしていったらいいのかというのが学校の問題でもあるし、社会の問題でもあると思う。携帯を触れば簡単に様々な情報を得られるが、本のように世界に入り込むといった経験を増やすにはどうすれば良いのかがこれからの課題。
- 委員 以前、脳科学の専門の方が人間の感性というのは 14 歳頃に完成すると言われていて、その頃に感動したものは、生涯、同じようなものに触れると感動できるそう。14 歳というと中学生。その頃に本って面白いなと思えた子は、将来、本に親しみ、読むことが面白いと思える。これは本に限ったことではない。中学生、高校生などの図書館に一番来ないヤングアダルト層、特に高校受験が始まる頃からは受験の本は読むが一般の本は読まない時期になる。その頃に本が面白いという体験をうまくさせてあげることが必要なのだろう。何か良い知恵がないかと思う。
- 委員 活字を読む時間が漫画に取られていると感じる。漫画にも人生にとって役立つような名言がちりばめられている。感動するアニメや漫画を見ると、活字の本がそういうものに押されているなと思う。

○委員 実物の本からネットの本にしようかと思うこともあるが、読みにくさも感じる。やはりページをめくりながら本を読むことに慣れている。若い子は少しずつ違う感覚になってくるのかもしれないが、そういった経験をしっかりさせておいてあげることも必要だと思う。

○委員 多岐にわたる事業をされているなという感想。重点事業のQRコードから絵本が読めるという民間企業と連携したお菓子の事業は単年のものなのか、それとも複数年継続が可能なものなのか。読書を広めるという趣旨からすると、来年も続けても良いのではと思う。また、お菓子の種類が増えることも考えられるのか。もう一つは同じく重点事業のべんりやん図書館の活用で、私もホームページを拝見したが、図書館のイメージなどがわかりやすく掲載されているなと感じた。これは例えば実際に学校と連携してホームページを運用されているのか。それからツイッターにて本の紹介をされているが、具体的にどういった配信内容なのか。

○事務局 お菓子事業については、民間企業からお話をいただき、おおよそ1年間を目安に実施している。今回のココアシガレットドリンクに関しても民間企業から第2弾のお申し出をいただき実現した。また、その効果等を見ながら民間企業からオファーがあれば、内容を確認した上で今後も連携していきたいと思っている。次にべんりやん図書館については、例えばヤングアダルト層などの図書館に来る様々な利用者の声を聞きながら、べんりやん図書館の活用をホームページに反映させていると図書館から聞いている。最後に府公式ツイッターについては、11月末時点で33回配信しており、これは直接、地域教育振興課が行っている。例えば、サッカーが盛り上がった時期にサッカーに関する本を紹介するなど、その時々に合わせて中高生が興味を持ってもらえるような本を選定し、紹介をしている。

◆議事(2)教育コミュニティづくりにおける地域人材の養成について

○委員 教育コミュニティづくりを支える地域人材の養成は府全体の課題。これまでの議論にもあったように、この課題に対してどのように取り組んでいけば良いかは、どこの市町村も頭を悩ませている。府内のある市の社会教育委員会議でもしばしばこの議論になるが、話が前に進まないことがある。先ほどの議題でも出たが、ボランティアに縦割りの考え方があることは事実で、教育系や福祉系といったものがあり、教育系は教育系ボランティアだけを育てなければならないという考えが根強くある。人材をどう発掘し、育てていくかということは、校区の学校関係者、地域関係者の意向や働きかけがすごく大きい。さらに人材不足というのはどの地域にもある状況。共働きの家庭など、時間に余裕のない方が多くなってきたことや、市町村の社会教育担当者が育ててきた地域人材をどう使って良いかわかっていないということは以前からある。例えば、この人をこの校区につなげればもっと地域が活性化するのではないかといった発想は、市町村の社会教育担当者にはないのではないかと。縦割りの課題に加え、各市町村で育てた人材を、どうやって地域に返していったら良いのかというイメージがわからないことが大きな課題。発想の柔軟性とコーディネート力が大切だと思う。ある市では地域コーディネーターの育成に限らず、幅広く人材を育てていくため、首長部局に地域創生塾というものがあるが、教育コミュニティづくりの一環としてそこで育成した人材

をコーディネーターや地域学校協働活動の推進に活用しておらず、そもそも使つて良いものだとも思っていない。それぞれの市町村に背景や地域性があり、何か一つの育成モデルを押し付けるとするのは難しいところがあるので、うまく地域人材を育てて地域につないでいる自治体のモデルをいくつか発掘し、社会教育担当者やコーディネーター活動を頑張ってくれている方などに、研修の場などで伝えていく機会があると良いのではないかと。自分たちの地域で人材を発掘し、地域につなげてもらったことがわかるような研修会をすると良いと思う。また、今回提供していただいた出前講座のように、各市町村と協働で研修をすることで市町村の社会教育担当者にも伝えていけると良いと思う。今後、地域人材を育て、その活用方法がわかるような内容を考えていただけると良いと思った。

○委員

地域ボランティアや学校にとって有用な方は、地域にとっても貴重だが、研修でこういった人材を育てて、地域で何をしてほしいのかという観点が重要。例えば、地域にコーディネーターとして一生懸命頑張っている方がおられると、その立場の人を増やしたいとはならないため、コーディネーターが高齢化していき新たな担い手がなかなか見つからない。コーディネーターの立場や役割をモデルとして人材育成するのか、あるいは予算を付けて地域学校協働活動推進員として位置づけ、学校と地域をつなぐ役割を担う方を育成するのか。もしくは段階として、すぐに活躍してもらうのではなく、まずは地域や学校の方針、国の施策等を理解してくれる方を増やしておくこともあるのではないかと。ただ漠然とコミュニティを支えてくれる人材育成が必要だと言うだけでは、育成される側もこの講習を受けたらどんな立場でどんな活動ができるのかという疑問を持つことにならないだろうか。

○事務局

現在、地域のコーディネーターが各所で地域学校協働活動推進員として委嘱され、活躍されている方も出始めている。地域の方や子どもたちと学校をつないでいただけるようなコーディネーター、地域学校協働活動推進員に当たる方たちをそれぞれの地域で育てていきたいという意見を市町村からも聞いており、府としてもその形が良いと思っている。ただ、地域によって切迫感や困っている部分が違うのではないかとと思うので、人口の違いなどの地域の実情に合わせ、人材を養成していきたいと思っている。そして、先ほどご指摘いただいた、研修を受けられた方に何をしてほしいのかを明確にし、市町村の担当者がどういうビジョンを持っているのかといったあたりは、今回の出前講座でも府と市町村でコミュニケーションを図りながら、なるべくニーズの多い取組みをしていきたいと思っている。どういう立場でどんな活動ができるのかについては、今後も研究していきたい。

○委員

学校をベースに何か活動を支援しようという人たちの議論でよく言われるのは、少しでも学校に関わる人は、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動といった言葉を知っているが、関りのない人はさっぱり知らないということ。文部科学省も学校ベースに地域創生していきましょうと言っているが、実は地域の人からすると私は学校に関係ないと思っている人がたくさんいて、こういった人たちが学校とリンクして活動するとなったとき、やはり他人事になってしまう。だから、おそらくまだ福祉と教育のすれ違いがあるのかもしれない。もう少し広く地域創生を考えたとき、結局、自分たちの地域は自分たちで何とかしなければいけ

ないというのが先にあり、その地域の中に学校があるという考え方が大切で、学校は地域の未来を支えていく子どもたちがいるのだから、地域のことを考えるには学校のことを考える必要があるという順番だと思う。だから、あまり学校に縁遠い人に対して、教育という言葉を入りに声かけをしてもピンとこないのではないだろうか。

○委員

事業や教育現場の現状を知ってもらうことが目的ならば、シニア大学や高齢者大学といった勉強の意思がある人たちに見てもらうことも大事だと思う。地域には今でも老人クラブや高齢者の集いのようなものがあるが、私の経験では子どもたちに何かを教えに来てという教育的観点からのアプローチだと、だいたい失敗する。以前、大正琴クラブの方々に「おばあちゃん、ちょっと子どもたちに教えてあげて」とお願いして学校に来てもらったが、その言い方だとおばあちゃんたちは教えようと構えてしまい、自分たちで琴を弾かず、ずっと子どもたちを待っている結果になった。そして「子どもたち、誰も来ないなあ」と言って帰っていった。それが3回続くと「私たちが行っても興味ないみたいやからやめとくわ」と言って断られた。これはもったいないと思い、「この部屋を貸すから、土曜日の午前中に使っていいですよ」と言うと、おばあちゃんたちは「それはありがたい」と言って学校で琴を弾き始めた。琴の音が鳴っていると子どもたちが「おばあちゃん、何してるん」と集まってきた。すると「一緒にやるか」となった。こうなるとウィンウィン。練習する場所ができて、子どもたちに教えられる。ゲートボールでも、「おじいちゃん、おばあちゃん、学校の中庭貸すよ」と言うと、最終的には子どもたちが集まる。だから、シニア大学などに通っている知識や意欲のある人たちに学校に来てもらい、これは子どもたちの生きる力のために必要なことだと思ってくれると非常に心強い。やはりエリア型よりテーマ型のコミュニティをうまく使った、地域の方々の顔が見える仕掛け作りの方が良いのではないかと感じた。

○委員

コロナ禍で学校としては保護者の参観も難しく、ボランティアに来てもらうことができなかった。ボランティアに来てもらって、例えば清掃や美化をやってもらう、子どもたちへ勉強を教えてもらう、学校の壊れているところを修繕してもらう、バザーを開催して学校の費用にあててもらうなど、できる活動にはどんなことがあるか、教頭先生の業務が増えることも考えると、何がいいだろうと悩んだ。中学校では放課後にクラブがあるためなかなか難しいし、以前は土曜日にお祭りなどをやっていたが、今は土日に職員を動員するのは難しい雰囲気が強まってきているので、クラブをお休みにして地域のお祭りをするというのは難しい。その中で、おおさか元気広場の取組みとして公民館に集まって活動していた小学生が中学校に入学してくると、慣れているからか、学校行事などで活躍してくれる。そういうところで活躍した子は、中学校でも作文コンクールなどで賞を取ることもある。小学校には放課後の部活はないが、クラブ活動のようなものがあって、そこで見てくれていた大人が中学校に協力してくれるというつながりも面白いなと思った。ボランティアに何をしてもらうかは学校側も悩んでいると思うので、どうすればお互いにメリットがある取組みができるか悩んでいる。

○委員

コロナ禍で様々な学校支援ボランティア活動が止まっていたので、今はそれらを少しずつ回復させているところだと思う。地域学校協働活動は学校へボランティ

アに来てもらうというだけでなく、子どもたちが地域の中に出て行って、地域の方と触れ合うということでもある。これは以前、ある中学校の校長先生に聞いたことだが、その学校でも地域ボランティアに関わってもらう機会や、放課後の学習支援に来てもらう機会をつくるなどしていたそうだが、校長先生の発案で、各クラブが年間に一度は地域の行事にボランティアで関わる機会を持つという活動をされている話を聞いた。活動内容は商店街のイベントの手伝いや、ブラスバンド部の発表などで、その調整は教頭先生だけではなくコーディネーターの方とも調整して、どんな行事があるかを聞きながら選択してつないでいく。すべてを教頭先生がコーディネートするのではなく、このような一緒にタッグを組んでくれるコーディネーターの方をどう育成するかも課題ではないか。そうした地域の実態に即した人材育成に向けた研修を進めていかなければいけないと思った。

○委員

学校だけではなく、地域コミュニティをどうしていくかという課題がある。地域に学校があり、行政としても小学校区というまとまりがあるので、校区で地域のことを考えるときに、学校は一つのステーションという位置づけになるだろう。だから、全部のベクトルが学校の方へ向いている必要はなく、地域の人々が地域の活動をしっかりとやってくれるというのも大切。また、地域で活動している団体もどんどん高齢化しており、若い人たちを引き込まないと続かない。活動を面白くしていくためにも、俳句などの団体であればテレビの影響で俳句が流行っていることを利用して若い人材を取り込み、学校部活動の地域移行と併せて子どもたちがクラブ活動として入れるようにするのも良い。子どもたちと一緒に活動することが地域の人たちにとってもメリットがあると思ってもらい、協働につなげていく。こちらがお願いして学校のために何かしてくださいと言うのではなく、地域の方々の活動を活性化するために若い人材と連携したり、たくさんの方が入れるように開かれたコミュニティにする努力をしたりすることも必要だと伝えていく。楽しい活動をしているからもっといろいろな人に入ってほしいと思っていて、それが地域のためになるという視点があるのならば、団体としての努力がますます必要なのではないかと思う。教育というとなんだか堅苦しいが、こういった形であれば子どもも地域の方々も、学ぶ機会が地域にたくさんあることになる。自分のスタイルに合わせて活動できる団体が地域の中にたくさんあれば、地域コミュニティとして成立している。文部科学省の施策として、学校と地域が協働するためには、子どもたちに学校教育だけではなく、もっといろいろな体験をさせてやらなければならないということを、どれだけ地域が理解して手伝えるかが課題になってくる。そういう理解者を増やすことは必要ではないか。自分の子どもが学校に行っていない住民は、自分が住んでいるところの教育とはそんなに関りが無いから、学校をベースに話をされても、あまりイメージがわからない。自分たちのコミュニティの高齢化が進んでいることの方が課題に感じる。また、近くにお子さんがいらっしゃる家庭があれば、そこをどうしようかなと考えていく方が順当かと思う。

○委員

他府県の事例として、ある地域では担い手の高齢化が進んでおり、将来、学校の子どもたちにこの地域で生活をして欲しいという思いから、石垣作りなどの伝統文化を伝える取組みをされている。押し付けにならないよう、この地域では学校の推進員として社会福祉協議会の職員が関わっている。例えば子どもたちに石垣の説明をするのではなくて、「身近にある石垣がどうやって作られているのか」

といった問いかけをし、子どもたちが自ら調べるといった学びの活動をしている。そして実際に地域で石垣作り体験をするといった事例があり、アクティブラーニングのような答えを導き出す過程を大事にすることが、子どもたちの気づきや発見につながる。こうした取組みが子どもにとっても様々な伝統文化などを学ぶ場にもなるし、中長期的な観点から地域の担い手を育成することにもつながる。こういった取組みの働きかけも大事になってくるのではないか。もう一つは、その取組みの見える化。大阪府内でも取組みが進められているかと思うが、例えばモデル地域などを設定して、こういった活動があるということを広めていき、そこから人材養成の講座にもつなげていくのも有効ではないかと感じた。

○委員

学校は、社会の中の一つのグループとして一番わかりやすい。校区があるので、しっかりした社会集団ができやすいと思うが、今、学校では子どもを銚（かすがい）にして大人をつなげていくことが難しくなっている。これには地域のつながりが希薄になってきていることやコロナ禍が理由として挙げられる。したがって、つなげていくための活動をする際、楽しみなどのメリットを伝えていくことが大事だと思うが、共働きの家庭が多いため、学校現場から地域に対して「こういう活動をしたらメリットありますよ」となかなか言えない。だからこそ、今は働いている人を巻き込んでいく必要がある。働いている方で土、日にリフレッシュするために集まるといった、仕事をしながら地域の活動として楽しめるものを企画していかないと、地域の大人をつなげていくのは非常に難しい。今は小学校の保護者でも40歳代の方も多くいらっしゃるし、地域で活動する子ども会などのまとめ役の方は50歳代、60歳代の方も多し。そういった方々が子ども会の役割から外れる際の理由として、子育てと介護の両立や自分の体調のことを言われることもある。下の世代をつないでいかなければいけないが、そういった方々が働きながらでもできる環境を整えていかなければいけない。もう一つはコロナの影響もあるかもしれないが、ボランティアが担っていた役割を外部機関にお願いするようになってきている。一つの例を紹介すると、学校の体育大会や運動会でPTAの方々に受付などをご協力いただくことがあるが、PTAの活動は結構多く、数十人にご協力いただく必要がある。これをある学校ではPTA会費から支出して人材派遣会社に依頼したところ、大好評だった。そういった形でお金を払って解決したというケースもある。それから子ども会などで子どもと一緒にソフトボールやサッカーをやっている方の中にも、子どもと一緒に楽しもうという方や、逆に一緒にでは不安だから、お金をかけて専門知識のある方に預けたいという方など、価値観もこれまでと違ってきている。子どもの幸せのために一緒に何かやろう、子どもを銚にして地域の一体化を図ろうということにメリットを感じていたり、一緒にやったら楽しかったという思いを持っていたりする親御さんを大事にしていくために、小学校ではそういった方々の話を広げていくことに努力しているつもり。そういった方々はやはりPTA活動を経験した役員や委員に多いので、「PTAやってよかったですね。この経験を次の方々に伝えてくださいね」とお願いしている。金銭的なわかりやすいメリットがあるわけではないので、「やって良かったな」という思いを伝えていかなければならないと感じている。

○委員

ある高校では地域に貢献する自立した人を育てることをミッションとしている。高校生になると社会に出ていくことを意識するようになるので、お年寄りや児童

生徒を含めたその地域にいらっしゃる方々に、小、中、高と育ってきた自分が何を還元できるのかという観点で、社会に開かれた教育課程を展開していく。そういった流れを考えながら地域を作っていくことが、今、課題になっている。地域で生徒が生活し、親も生活し、お店を支えたり、役所を支えたり、委員を支えたりする住民になっていくので、高校がある近隣だけではなく、生徒が通ってきている居住地や市区町村のあり方を大事に見ていかなければいけないというのが高校の地域の捉え方。

○委員

先ほどご意見があったように、地域の人材育成の導きたい方向性は、参加することに喜びを感じたり、リフレッシュになったりすることではないか。特に働いている親は学校教育活動に参加する機会は限られているが、やはり何か地域とつながりたいと思っている親も多いと思う。以前に府内のいくつかの地域でもあったような子どもの卒業後もボランティアの一員として参加できる学校応援団的なPTAや、地域とつながりたいと思う人が親睦会などで気軽に集まって学校を支えられる形が良いのではないか。それを学校が全面的にマネジメントするのは、今は難しいので、呼びかけやボランティアの取りまとめをしてくれるコーディネーターの方が必要なだろう。そういう場で次世代の方が育っていくことも一つのモデルだと思う。校区の地域組織は大阪府内でも様々なので、年度末にある教育コミュニティづくりの大きな研修会などで人材育成に特化したテーマを設けて、府内の地域人材の育成の事例を2、3市町村に発表していただくのも良い。様々なモデルを参加者に知っていただき、自分の地域の参考にしてもらえるような研修などがあると良いのではないか。

○委員

高校のPTAは小中幼稚園、保育園などに比べると、そこまでしっかりと学校と連携して活動することはないが、やはり小中での経験がある保護者の方が高校でもやる流れが多い。高校でPTAも終わりということもあり、中には物足りないと言う方もおられて、子どもが大学生になったら小学校のPTAに戻って放課後クラブなどをやり始めたというケースも結構ある。私の周りを見ていると小中のPTA活動をやって横のつながりもあり、思い入れもあるような方は、子育てが一段落するとまた小学校でやっても良いと思っている方が結構多いのではないかと思う。もちろん、もう関わりたくないと言う人も確かにいるが、本当に意気込んでやってきた人は横のつながりや小学校6年間の縦のつながりもあり、コミュニティができているので、集まってランチ会に行くといったメリットもあるようで、そういう方を巻き込んでいったら良いのではないかと思った。

○委員

地域学校協働活動において、PTAの経験者の方は学校のことを理解してくださっているからスムーズに活動が進むことがある。PTAに関する議論もいろいろあり、PTCAとしてコミュニティも入れた方が良いのではないかという話もある。その学校に子どもが通っている親だけでなくとも良いのではないかという議論も出てきている。おそらく言われた通り、PTAで良い経験をされた方はその良さを地域に広げていかれるので、楽しく活動することが自分にとっても地域にとっても良いことだという認識が広がっていくのは良いと思う。自分たちの町や団体のことは自分たちが何とかすると思えるよう、みんなで考えて行く必要がある。また、企業の新採用教育や新任教育などを担っている部署の方と話をした際、「大学で成績の良かった学生は、私はこんなことができますと一生懸命に主

張するが、自分は何ができるかではなく、お客さんは何がしたいのかを汲み取って、それに対して自分がどのように力を発揮できるかということを考えて欲しい」という話をされていた。学校教育では自分はこれができますと一生懸命訴えないと好成績をつけてもらえないが、社会に出ると人のために何ができるかというベクトルが変わる。社会で生きていくということは人のために何かする、人のために何ができるかであって、高校の教育などは、まさに地域に対して自分は何ができるのかを考えていく必要がある。人のために何かやるということは、実は充実感があって楽しいし、自分のためにもなるという思いを共有できるような研修が出来たら良いのではないかと感じる。学校をベースに学校を何とかしましょうと言っても少し難しいのではないかという実感がある。もちろんPTAの方々は非常に理解があるし、今の学校の動きを知っているからとても力になる存在だが、全く学校に縁のない人たちに、こういった活動や地域のことなどをわかってもらえるような広報も必要だと感じた。